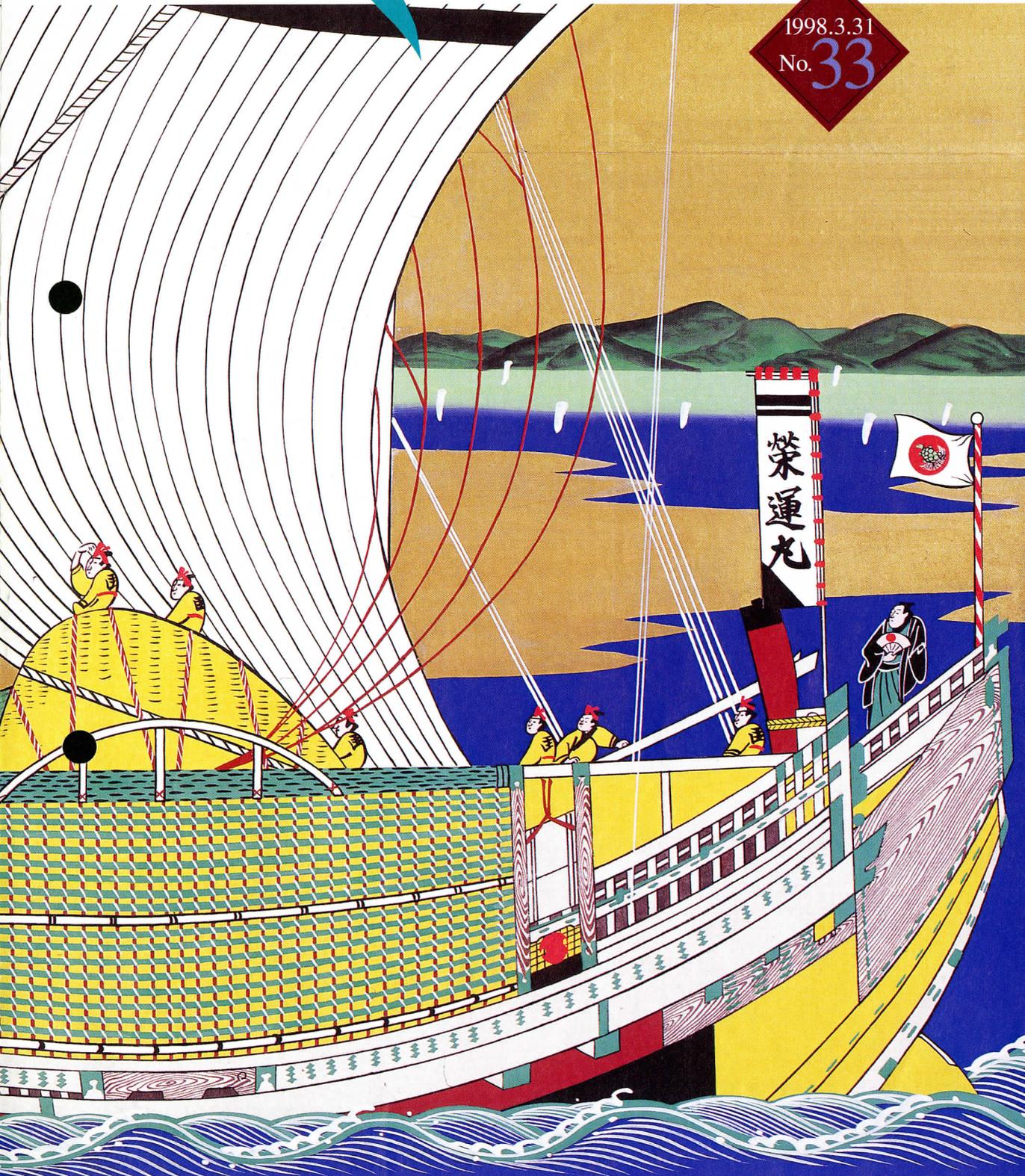


ふくいのミュージアム

1998.3.31

No. 33



復元「船絵馬」(裏表紙参照)

特 別 展 紹 介

「発掘された日本列島'98—新発見考古速報展—」

平成10年9月20日(日)～10月11日(日)

「ふくい発掘最前線」

平成10年10月17日(土)～11月15日(日)

日本全国で、毎年約1万件もの発掘調査が行われ、その成果が、新聞・テレビを賑わしています。そうした報道に接して、歴史に興味を持たれる方、発掘されたものを自分の目で見てみたいと思う方も多いと思います。

しかし、全国各地で発掘された遺物を実際に見る機会はなかなかありません。そこで、巡回展「発掘された日本列島'98—新発見考古速報展—」(文化庁主催)では、昨年発掘調査された遺跡・遺物の中から、特に注目を集めたものを紹介します。

また、福井県内でも、発掘調査が数多く行われています。みなさんの近所でも発掘現場を見かけることがあるのではないのでしょうか。

そこで、「ふくい発掘最前線」では、福井県内で近年発掘調査された遺跡のなかから、主な成果を一堂に展示します。みなさんの家の近所、学校の近く、通い慣れた道ばたに眠っていた歴史の断片を感じていただければ幸いです。

「発掘された日本列島'98—新発見考古速報展—」

縄文時代のコーナーでは、まず大船C遺跡(北海道)を紹介합니다。この遺跡では、600を超える堅穴住居跡がみつかりました。縄文中期の北海道南部における拠点



的なムラではないかと考えられています。この住居跡内で出土した鯨の骨(蒸し焼きにして食べていたという説もあります)、青竜刀形石器などを展示します。

また、縄文時代の祭祀遺跡として注目された二枚橋遺跡2(青森県)からは、人がひざまずいた形を立体的に表現した蹲踞土偶や土で作った面など、高床式住居の建築部材が出土して話題になった桜町遺跡(富山県)からは、コゴミなどの植物性食料や調理用具などを展示します。これらのほかにも、日本全国の遺跡から、縄文時代の文化や技術を物語るさまざまな遺物が展示されます。

やがて、日本列島に稲作が伝わり、それまでの縄文時代の生活が大きく変化する時期を迎えます。それが弥生時代の始まりです。弥生前期の新方遺跡(兵庫県)からは、そうした時代の変化に直面した人の骨を展示します。この人は、30～50才くらいの男性で、頑丈な顎、がっしりした体つき、固い物を食べ続けてすり減った歯をしていて、縄文人の体つきの特徴を備えています。



発掘作業風景

彼は、胸に石の鎌がささったまま、うつぶせにして埋葬されていました。すぐ近くから、同じように矢を受けてなくなったと見られる2体の人骨が発見されています。これは、縄文時代を生き抜いた人々が稲作をはじめとする文化を受け入れ、より豊かで安定した生活が可能になったと同時に、集団対集団の戦いー戦争ーが本格化したことを示す資料として重要なものといえます。

この他にも、八王子遺跡(愛知県)で出土した、さかさまに埋められた銅鐸や、弥生時代後期の唐古・鍵遺跡(奈良県)から出土した、いろいろな青銅製品の鋳型外枠、青銅を溶かすのに使用した道具などを展示します。

古墳時代の展示資料でまず目を引くのは、石薬師東古墳群63号墳(三重県)の馬形埴輪でしょう。5世紀後半の古墳から出土したもので、当時の馬具の装着の方法などがよくわかります。通常の馬形埴輪とは違い、頭の後ろ、たてがみにあたる部分が大きく、ユニークな形をしています。ぜひ実際にごらんになってください。

また、「卑弥呼の鏡」として話題になった「青龍三年」銘鏡を含む、安満宮山古墳(大阪府)の銅鏡類も一見の価値があります。その他、古墳に副葬された玉類、武具などを展示します。

奈良・平安時代では、細工谷遺跡(大阪府)から、全国で初めて出土した和同開珎の枝銭をはじめとした金属製品、大知波峠廃寺(静岡県)の陶磁器、墨書土器類などを展示します。また、常見遺跡(栃木県)の竪穴式住居跡か

ら出土した仏像、由比ヶ浜南遺跡(神奈川県)で見つかった、浜に集められて埋葬された遺体などの庶民の生活の一端を示す遺物も展示されます。

中・近世では、湯山御殿跡(兵庫県)の陶磁器類があります。これは、豊臣秀吉の時代に使われたもので、秀吉が有馬温泉に築造した湯殿の位置を考える上で貴重な手がかりです。これらの遺物から、文献史料や言い伝えに残る通り、秀吉が戦いや政治の疲れを有馬の地でいやしていたことがはっきりしました。

出島阿蘭陀商館跡(長崎県)から出土した染付皿には、「VOC」という文字が入っていました。これは、オランダ東インド会社(VOC:De Vereeninde Geocroyeede Nederlandsche Oust Indischu Compagnie)の社章です。長崎の対外交流の様子を端的に表す資料といえます。

これら以外にも、近年積極的に発掘調査されるようになった近世、ひいては近現代の遺跡のさまざまな遺物を展示します。

こうして見てくると、日本全国、北は北海道から南は九州まで、また時代的にも、旧石器時代や縄文時代といった、いまから1万年以上も前の遺物から、ほんの100年ほど前でありながら、今となっては使われなくなったものまで、遺物が展示されます。これらの遺物が、今後、何年もかけて整理、調査され、日本の歴史を少しずつ明らかにする手がかりになっていきます。

「ふくい発掘最前線」

「ふくい発掘最前線」のみどころは、発掘後、初めて公開される遺跡や遺物が数多くあることです。

時代ごとに例を挙げると、まず縄文晩期のトチの加工場、貯蔵穴が出土した四方谷岩伏遺跡(鯖江市)があります。ここでは、原形をとどめた籠、トチの実を貯蔵した穴の断面など、縄文時代の生活をかいま見ることのできる資料を紹介します。

弥生時代の玉作り集落である林・藤島遺跡(福井市)は、当時出雲と共に玉作りの拠点であった北陸を象徴する遺跡のひとつです。ここからは、玉作りのための鉄製工具など、弥生時代の技術を物語る遺物を展示します。

古墳時代では、前方部に武具が埋納されていた向山1号墳(上中町)の出土品をまとめて展示します。大量の鉄製武器が埋葬された人物の勢力をうかがわせます。

奈良・平安時代では、北市遺跡(勝山市)で見つかった竈をそなえた堅穴住居跡が目目されます。王子保窯跡(武生市)から出土した、多様な須恵器も目を引きまします。この窯の製品は当時の寺院や役所で使われたと考えられます。

鎌倉から室町時代にかけての越前焼の窯跡である西山窯跡(織田町)も注目の遺跡です。ここから出土した越前焼は、その質・量ともに、近年の発掘成果中、有数

のものといえます。13~15世紀の寺院である諏訪間興行寺遺跡(永平寺町)からは大量の青磁・白磁を含む遺物を展示します。また、全国的にもめずらしい中世の礫塚墓である家久遺跡(武生市)からは、文房具を中心とした副葬品だけでなく、礫塚(自然石を敷いた墓穴)そのものも初めて公開します。

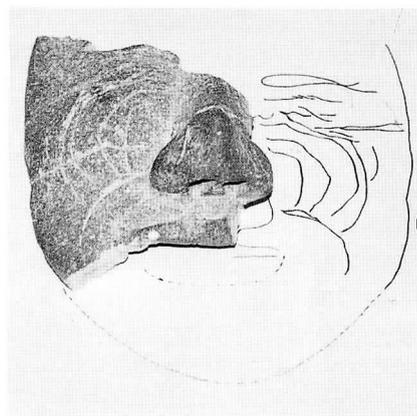
ところで、最近の全国的な傾向として、近世、あるいは近代にいたるまでの遺跡が、発掘調査の対象となっていることがあげられます。江戸時代の城、町家、明治時代のワイン工場といった発掘成果が全国から報告されています。福井県内でも、平成2年から始まった市街地再開発に伴って福井城跡(福井市)の発掘が始まりました。文献資料だけでは知ることの難しい江戸時代の生々しい生活の痕跡が紹介され、市民の関心を集めています。この福井城跡からは、木簡をはじめとする木製品、陶磁器などを展示します。

これらの他にも、7C前半の製塩遺跡である松原遺跡(美浜町)、10C末ごろの製鉄遺跡である細呂木遺跡(金津町)といった生産遺跡、けつ状耳飾りの大量出土で著名な縄文早期の桑野遺跡(金津町)など、さまざまな遺跡を紹介しまします。

(瓜生)

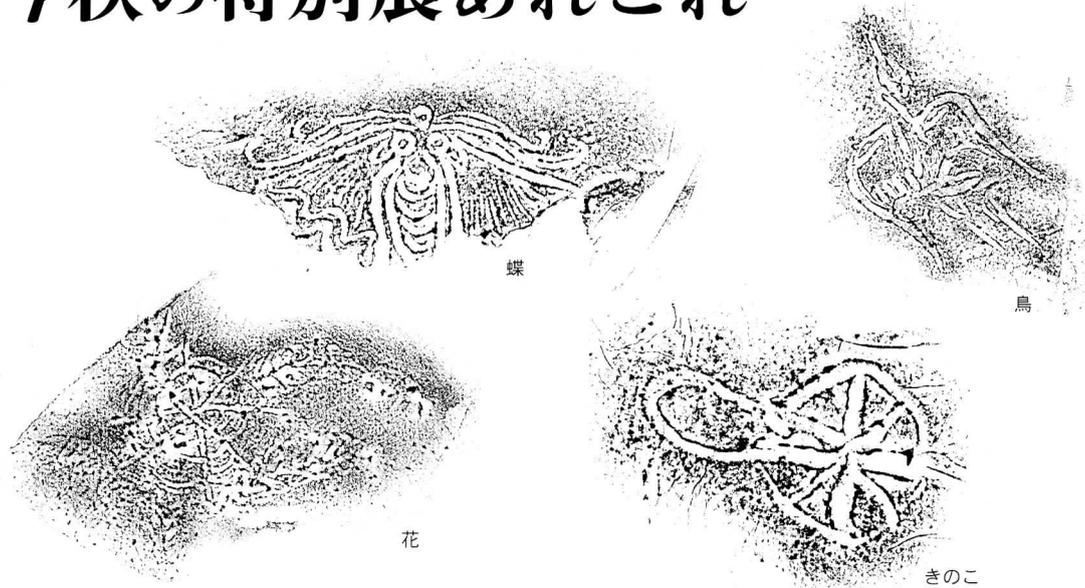


礫塚(家久遺跡)



越前焼の面(西山窯跡出土)

今秋の特別展あれこれ



西山窯跡出土越前焼の線刻画(拓本)

この秋に博物館で開催される「発掘された日本列島98」-新発見考古速報展-には、まだ公開されたことのない近年の発掘資料が数多く出展される。全国から出展される話題の資料のなかでも、福井県の西山窯跡出土資料は、質・量ともに逸品ぞろいである。

日本の六古窯のひとつ越前焼の産地として知られる丹生郡織田町の西山窯跡で、大量の越前焼が出土したのは平成8年(1996)のことだった。

西山窯跡は、織田町の中心にある越前二の宮「劔神社」の西の丘陵にあって、これまで検出例の極めて少なかった鎌倉時代後半の窯跡である。発掘によって、操業中に廃棄された大量の陶片の山を検出した。それは窯から引き出されたままの状態では埋没したブロックと、引き出された後に再度移動されて埋没したブロックとからなっていた。

出土資料のうち、甕・壺・鉢が全体の95%余を占めており、他に水注・陶硯・陶錘・分銅形陶製品・経筒外容器等が出土している。

出土資料のほとんどを占める甕・壺・鉢は、大きさ、形にバラエティがあり、多様な器種構成をもっている。これは、多様な需要に対応して生産されたことによるものと思われる。

量的には少ない甕・壺・鉢以外のものは、自他ともの多様な需要に供するため、生産されていたと思われる。

壺や甕の中には、肩に線刻された絵画が見られるものがある。焼成前に描かれたものであろうが、巧みな描法と陶工たちが作陶するなかでのアソビ心が感じられる。

モチーフとなったのは、「鳥」「蝶」「草花」などであった。蝶は、四本の触角と三個の目があるが、これは蝶としては異形である。足が見えないところから、羽を休めたところを真上から描いたのであろう。

鳥は、首を突き上げて足を後方に伸ばし、羽で風を切って上昇する姿を描く。他にも明らかに飛鳥と見えるものがあったが、ともに力強い線で掘り込まれている。

草花は、なかほどの蜘蛛の巣のような部分から細いしなやかな茎が伸び、両側に行儀よく小さな花が葉がならんでいる。垂れ下がる藤の花のようにも見える。他にも草花をモチーフにしたものが数点ある。

また、絵画以外にも線刻された「いろは」文字、「花押」や窯印と見られるものなどがある。唯一立体的造形である人面形の陶製品は、目、鼻、口を穿って面として使用することを目的として製作されている。

これら陶片に遺された陶工の教養と芸術的要素は、当時の社会が精神的な余裕を生み出していたかのように見える。

現在、福井県埋蔵文化財調査センターにおいて鋭意整理中であるが、日本海海運の流通経路で越前焼が全国的ブランドになる以前の鎌倉期の生産体制がこれらの多様な製品を生産しており、近世の壺・大甕・搦鉢の一边倒の少品種多量生産体制ではないことがうかがえる。

一部の紹介にとどめたが、今秋の特別展の観覧にあたっては当時の陶工の心意気を観て、感じていただきたい。

(山口)

越前吉崎の「由緒地」化をめぐる

澤 博勝

はじめに

今年(1998年)は、本願寺再興の祖蓮如の

500回忌にあたり、東西両本願寺以下各地で関連のイベントが行われている。福井(越前)でも、東西両福井別院を始め、末寺や村むらの講中クラスに至るまで様々な行事が予定されていると聞く。中でも、毎年蓮如忌の法要が行われ、両派別院以下願慶寺・吉崎寺等の寺院が存在する吉崎での「盛況」はかなりのものである。周知のように、吉崎は堅田(近江)を追われた蓮如が文明3年(1471)に坊舎を建て、ここを基盤に北陸各地に教線を拡張した場所である。蓮如の吉崎滞在は四年余であるが、この間かなり積極的に活動を行ったようであり、越前各地にもその時に教化を受けたという伝承が残っている。しかしながら、それらの多くが後代に作られた伝承であり、村むらの末寺や講中等に残されている蓮如自筆とされる御文(御文章)や名号の多くも、後の時代に下付されたものであったり、地元作成のものであるケースが多い。

では果たしてそれらの多くはいつの時代に、どうしたことを契機に作られたものであろうか。この点を探ることは、モノとしての骨董品の価値を持たない偽文書や偽名号に、歴史史料としての価値を付与することになるであろう。同時に、近年、歴史学で主に国民国家論の問題と関連して注目されているいわゆる「創られた伝統」論⁽¹⁾を、前近代の宗教社会史研究(しかも教団仏教を対象とした)に導入することで、宗教史研究と歴史学一般を結びつけることにもつながるであろう(但し小文は本格的な議論を展開する場ではないので、史料を掲げた詳細は別の機会に譲り、ここでは全体の概観を述べるにとどめる)。

1. 「御山」をめぐる東西両本願寺争論

文明7年(1475)に蓮如が離れた後、吉崎は「越前大坊」と呼ばれた諸寺院が守護していた。しかしその後16世紀に入り越前にも波及した一向一揆に際して、それらの大半は加賀に逃れ、近世初頭の東西分派を経て多くが帰越した後も、それらは元々の基盤地かすでに成立していた福井御坊の後見を務めるべく福井城下に新しい寺地を求めた。こうしたことも手伝って吉崎は地元以外ではほぼ忘れられた存在になっていた。

近世本願寺体制の成立に伴って忘れられた存在になっていた吉崎を「蓮如旧跡地」として甦らせたもの、それは地元からの働きに敏感に反応した東西両本山が主体となった御山をめぐる争論であった。争論全体は非常に複雑に推移するがここではその概要をまとめておく。

足かけ5年にわたる争論は、寛

文13年(1673)春、吉崎東派道場預り門徒山

屋太左衛門(吉崎の有力商人)が毎年毎月の蓮如忌日の法要場所を山上に移したいと本山に申し出、それを了解した東派本山から福井藩役人衆へ使いが派遣されたところから始まる。福井藩では早速当地を管轄している金津郡代(後の金津奉行)萩野小大膳に吉崎山上の知行について調べさせる。地元からは吉崎村の庄屋であり西派の道場主であった大家彦左衛門以下村民全員が対応するが、吉崎は大半が東派門徒であること、山上は往古よりの旧跡で村高の内にはなく毎年3月25日には金津永宮寺が山上に仮小屋を設けて法要を行っていること、こうしたことから山上は実質的に東派が押さえており東派のものとなることは否定しないこと、但し(承認の)文書への連判はできないこと等を答える。こうした地元の対応を受け、福井藩は延宝2年(1674)1月に山上に竿を入れ50間四方を東派に渡すことを決定、東派では雪解けを待って山下道場の移築に取りかかろうとするが、直後におきた福井東御坊龍花院の藩主松平光通への年頭挨拶無礼と光通の立腹、その再許諾を待っている間に生じた光通の自殺をきっかけとした福井藩の諸騒動等に巻き込まれて山上への移築は大幅に延期となった。この間も基本的に福井藩は東派の山上移築を承認していたが、その隙間に入ってきたのが西派から訴訟であった。

東派と異なり当該地にほとんど拠点を持たなかった西派本山は、当初吉崎に関する情報を全く持っていなかった。そこで福井西御坊を通じて、地元の門徒や中世以来の大坊を中心とした「古き寺坊衆」から情報を集め、三国教順寺が「越前坂北郡金津上野吉崎三ヶ所廿五日講」という准如裏書きのある蓮如御影を所持していることを知ると直ちにそれを本山に提出させる。さらに顕如から准如への本願寺留守居職相統の正統性や各地の旧跡地支配の実態(これは東派も主張、なかでも元和以降この段階でも決着が付いていない山科の問題が中心になる)等々を持ち出し、東派による吉崎独占支配の否定に着手する。一方東派道場の山上移築をほぼ承認していた福井藩は、争論が東西本山レベルの問題に展開してしまった以上手に負えないとし幕府への出訴を求め、以後幕府寺社奉行所を舞台とした出入りに発展する。ただこの後も福井藩は完全に手を引いてしまったわけではなく、福井藩江戶藩邸、幕府寺社奉行、老中・若年寄・町奉行・高家(東派は大澤兵部、西派は吉良上野介)さらには当時の幕府の最高実力者大老酒井忠清や徳川光圀等々、幕閣とその周辺を巻き込んだ一大争論に展開する。そしてもちろん出入りの主体は東西両門跡である。

山科の場合同様、容易に決着の付く争論ではなくなってしまっていた。延宝5年11月18日に寺社奉行から示された済口は、当地が越前と加賀の国境にあたる要害地であることと両方ともに若干ではあるが偽りの口上を行っていたということで山上は幕府が没収、東西両派ともに山上への道場移築は完全に否定された。最終評定の数日前までは圧倒的に優位といわれていた東派はこの裁決を不服として、東派を代表して参府していた横田主水らは執拗に再訴を願うが、最終的に寺社奉行らに説得され、再訴を断念し幕府法廷を舞台とした争論は終結した。

2. 吉崎争論における注目点

① 本山レベルでの対応

まずは東派の動向から見たい。東派本山は、当初は地元からの道場山上移築許可要請に許可を与えただけで特に関与の姿勢は示していない。事態が順調に推移していたということもあるが、これは一般の寺院普請や寺号獲得等に対する本山の対応と同様であり、吉崎が特別の場所であるという理解は少なかったと考えられる(福井御坊龍花院も同様であったと考える)。この点は顕如の時期に本山そのものが関与するようになった山科との相違点である。しかしいったん西派との争論となると、本山からは粟津右近(江戸へは下らず)・横田主水ら有力坊官や大念寺を中心とした御堂衆を動員し、一方で福井御坊を通じて地元からも末寺を参府させ、江戸御坊を拠点に、以前から関係が深かったと考えられる幕閣(杉浦内蔵允=勘定頭、渡辺大隅守=大目付、阿部四郎五郎=屋敷奉行)らと連絡を密にとりながら、評定の中心である寺社奉行衆を始め、より上位の幕閣、門主と昵懇の関係にある高家、さらには当時の最高実力者にまでも「内証」に接近するという、本願寺門跡としての権威を最大限利用するようになる。そしてその際東派が拠り所としたものは、福井藩から山上の知行権を獲得したということと、教如と家康との関係であった。

一方、西派の場合は東派と異なり元々当地にほとんど基盤を持っていなかったために、当初から本山が積極的に関与した。ただしそのきっかけは福井御坊からではなく地元金津三力寺からの情報であった点に注意しておきたい。西派本山の関与方法は1. で見たようにまさに「伝統」を「創り出す」といったものであった。しかし幕府法廷での出入りに関しては、有力坊官・御堂衆や地元末寺を派遣し、顕如→准如の相承を中心に自派の正統性を主張し、さらに幕閣らに接近する等、西本願寺門跡の権威を全面に出して闘っている点で東派と同様である。むしろ西派に関して特に注目すべきは、争論終結後の積極的な吉崎への介入であった。詳細は省略せざるを得ないが、争論終結後西派では、前述の蓮如御影を吉崎西派道場まで下向させ東派同様の蓮如忌を執行、増加する参拝者に対応するための道場の拡張普請、さらに山屋太左衛門から土地を購入し現在の別院の場所への道場移築等々、「由緒地」としての整備を行っているが、これらは全て本山からの指導によるものであった(なお、西派の場合この本山の直接介入が後に吉崎同行中・道場主対川北同行中・福井御坊という対立構造を導くがここでは省略)。

② 地元レベルでの対応

地元の対応は残された史料の性格から必ずしも詳細にはできない。ただそれでも、この一件の端緒が、当時の吉崎の有力商人であり東派の道場主であった山屋による申請であった点、当該期の西派道場主で吉崎村(浦)の庄屋であった大家彦左衛門以下西派門徒らも、御山の東派支配を認める証文への一紙連判は否定したものの別証文提出という形で承認した点、両派ともに地元末寺・門徒らが積極的に本山の出入りを援護した点、さらには争論終結後西派道場拡張のため山屋の土地を購入した点等々から、地元レベルにおける東西両派の対立面と、それを越え地元の繁栄を期待した協調面という両側面の存在が読み解かれ、注目される。(これら以外にも多くの注目点があるが省略する)。

結語

江戸での裁許に際して関与が確認された幕閣の問題や、同様の蓮如「旧跡地」とされる山科の問題との比較等々、今後追究していかねばならない課題は山積みである。ただそれでも次の点だけは確認できたであろう。すなわち、幕府による裁許は、一面で「山上の土手も引崩し(今後)人足これを入れざるように申しつかわずべし、国境のことに候間堅固に見えざるように相心得」と、国境の要害地という点を最大の裁許理由にしたため蓮如の吉崎坊舎段階から残っていたとも考えられる土塁(遺構)の破壊をもたらした。しかしその一方で、山下での活動は両派平等に保証されたため、裁許後は元々吉崎周辺(加賀まで)に勢力を持っていた東派はいくまでもなく、従来影響力をほとんど持っていなかった西派までもが本山レベルでのテコ入れに着手し始めた。さらにそれは両派の対抗意識の中で拡大していった(この分析は別の機会に譲る)。こうしたことが、東西どちらか一方が押さええている旧跡地とは異なった形で吉崎の「由緒地」化を促進した。その結果、東派に比べて西派の勢力が強い越前の各地に、蓮如吉崎滞在時に仮託された様々な伝承やモノが作成され現在に伝わっていると考えられるのである。

(註記)

- (1) E・ポズボウム、T・レンジャー編(前川啓治・梶原景昭他訳)『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年、安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店、1992年他。これらの成果を取り入れ、前近代の社会集団の「伝統」形成過程を追究したものとしては久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団-由緒と言説』山川出版社、1995年、があるが、教団仏教等に対する研究は含まれていない。
- (2) 小文で主に使用した史料は「延宝五年山上一件公訴江戸御坊日記之写」「粟津家蔵記写之延宝年中山上一件記」「延宝山上ノ一件東西ノ由緒裁許内容粟津文書元禄二写ス」(以上願慶寺文書)、『諸国江遺書状之留一』(同朋舎、1982年)であるが、紙幅の関係上逐一表記はできなかった。

(付記)

このノートは紙幅の関係もあり不十分な議論に終始したが、ややもすれば蓮如の時代をそのまま投影させてしまっている感のある昨今の吉崎での「盛り上がり」に若干の危惧を抱いてまとめたものである。なお、願慶寺の史料調査に関しては和田重厚氏(願慶寺住職)、朝倉喜祐氏にお世話になった、この場を借りてお礼申し上げる。

復元「船絵馬」



幕末から大坂で活躍した船絵師「絵馬藤(えんまとう)」の工房で製作された「船絵馬」の復元作品。現物には「絵馬藤筆」の落款があり、明治13年(1880)正月に福井県三国地方の神社に奉納されている。復元作業は、材料の質や製作手順の解明に力点を置いた。工程は、まず杉板を接合して和紙を貼り、その上に胡粉(白色顔料)を塗って

下地をつくった。つぎに船体部分を別の和紙に輪郭を描いて下地に貼り付け、その上に「泥絵具」を用いて彩色を重ねていった。とくに船体の輪郭、帆などにみられる曲線は、肘を固定させてフリーハンドで描くことを試みた。なお、製作には当館の学芸員と鳥村正博(額装と作画)、小林康三(表装)が携わった。

友の会 会員募集

こんな特典があります

- ・博物館と友の会の行事をもれなくご案内します。
- ・常設展示を何度でも無料で観覧できます。
(家族会員は1度に4名まで)
- ・特別展は1度無料で観覧できます。
(家族会員は計2名)
- ・研修旅行・見学会に参加できます。(有料)
- ・友の会会誌「Myミュージアム」をお届けします。
- ・館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

会費(1年分)

一般	2,500円	中学生・小学生	1,000円
大学生・高校生	2,000円	家族	5,000円
賛助会員	(一口)10,000円		

期間

1998年4月1日～1999年3月31日

入会方法

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ、会費を次のいずれかの方法で入金してください。

- ・直接、博物館内友の会事務局へ
- ・お近くの郵便局から郵便振替で(申込書は別送)
口座番号 00750-9-23379
加入者名 福井県立博物館友の会
- ・現金書留で郵送(申込書を同封)

◇入会手続き終了後、会員証をお渡しします◇